

## 今月の逸品

NO. 77 2026. 8～2026. 9

京都市伏見区深草藤森町1

☎ : 075-644-8537

✉ : manabi@kyokyo-u.ac.jp



MUSEUM OF EDUCATION



## 平安通宝

平安通宝は、文献記録からは確認できず、その铸造地、時期のいずれもが不明とされる銭貨である。

2001年に発表された高桑登の論考によれば、遺跡からの出土例は9例、伝来品は1例が確認されており、また近年では宝泉寺跡（東京都）出土の甕棺墓からも見つかっている。今回、教育資料館の収蔵庫から新たに発見された本銭は、その新たな1つとなる可能性がある。銭径は23.6mm、内径

16.9mm、厚さは0.9mm、重量は2.52gである。知られている平安通宝は、銭径・内径にそれぞれ0.7mm、1.4mmのばらつきがあり、既存の硬貨をそのまま型にして、複製の铸造を繰り返したと考えられている。铸造時期については、北宋銭と共伴して出土する事例がわずかに存在しているため、中世末～近世初頭（16世紀後半～17世紀初頭）と考えられる。

平安通宝の铸造地は不明ながら、一定度の推測を加えることはできる。手掛かりとなるのは、既知の11例のうち7例が東北地方（岩手県3例、山形県2例、宮城県2例）から出土していることである。この他の事例も、伝来品である愛媛県の1例を除けば、東京都、神奈川県、三重県からの出土であるから、東日本で铸造されていた可能性が高い。

では、平安通宝が铸造された目的は何か。これについては、出土した10例のうちの7例、そして伝来品の1例が墓や寺院に関連していることから、宗教的性格を有すると想定されている。江戸時代には安産のお守りとして市中の間に回っていた事も窺え、副葬品として墓に納められたのだと考えられる。

金属組成も興味深い。平安通宝の組成は、鉛が53%を占め、銅の割合（27%）が低く、ヒ素（6.6%）や鉄（3.5%）の割合が高い。また、鉛の同位体分析から、中国華南地方産の鉛を使用していると考えられ、ヒ素の多い銅と、中国鉛を使用していることが判明している。したがって、もし平安通宝が日本で铸造されたとすれば、当時の東北地方（ないし東日本）へ中国からまとまって原料供給がなされたことを想定しなければならない。中国との交易の窓口は九州、西日本であることが一般的だから、先の出土状況とは、うまく整合しないところがある。そのため、中国で铸造され、東日本になんらかのかたちでまとまってもたらされた可能性も十分に考えておかなければならない。

- ・斎藤努・高橋照彦・西川裕一「中世～近世初期の模铸銭に関する理化学的研究」（『金融研究』17-3、1998年）
- ・櫻木晋一『貨幣考古学序説』（慶応義塾大学出版会、2009年）
- ・高桑登「国内出土の平安通宝集成」（『出土銭貨』15号、2001年）
- ・東京都新宿区『宝泉寺跡Ⅳ』（ハウジングトラスト株式会社・株式会社東京航業研究所、2019年）

付記：教育資料館所蔵の古銭に関しては、2026年5月17日に櫻木晋一氏（下関市立大学名誉教授）による実見調査を受け、その中に平安通宝の可能性のある銭貨が認められた。また、本稿作成にあたっては櫻木氏のご教示を賜った。ただし、現段階では組成分析等による科学的検証は実施しておらず、真贋については今後の調査を要する。

執筆者：中村翼（社会科学科准教授）

※附属図書館で展示しています。